

して 里女 面〓小面(紐紫) 襟〓紅白 着附〓箔 唐織(着流シ) 鬘 鬘帶 小水晶数珠

後して 巴の靈 面〓小面(紐紫) 襟〓紅白 着附〓箔 緋大口 腰帶〓紋附 唐織(壺折) 鬘 鬘帶
梨打烏帽子 白鉢卷 太刀 薙刀 物着二 唐織 烏帽子 白鉢卷 太刀トリ 白練箔又ハ
白衣(壺折) 笠ト太刀持ツ

わき 旅僧 着附〓無地熨斗目 紺水衣 腰帶〓緞子 角帽子 墨絵扇 数珠

脇連 從僧二人 ワキ同断 但シ縷水衣

間狂言 粟津の里人

次第〓わき・脇連〓行けば深山みやまも麻裳あさもよい。行けば深山も麻裳よい。木曾路の旅に出でようよ

わき〓これは木曾の山家やまがより出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都へ上り候

道行〓わき・脇連〓旅衣木曾の御坂みさかを遥々と。木曾の御坂を遥々と。思ひ立つ日も美濃尾張定めぬ宿の暮毎に。夜を重ねつゝ日を添へて。行けば程無く近江路や 鳩にの浦とはこれかとよ鳩の浦とはこれかとよ

わき〓急ぎ候程に。江州粟津の原とやらんに著きて候。此處に暫く休まばやと思ひ候

して〓面白や鳩の浦波静かなる。粟津の原の松蔭に。神を齋いはふや祭事。げに神感も頼もしや。今日は粟津が原の御神事にて候程に。巫かんなぎ どもも参らばやと思ひ候。あら有難や候。昔の事の思ひ出でられて候

わき〓不思議やなこれなる女性にしやうを見れば。神に参り涙を流し給ふ返す返すも不審にこそ候へ

して〓お僧は自らが事を仰せ候か

わき〓さん候神に参り涙を流し給ふ不審にて候

して〓愚と不審し給ふや。傳え聞く行教ぎやうきやう和尚かしようは。宇佐八幡に詣で給ひ一首の歌に曰く。何事のおはしますとは知らねども。忝さに涙こぼるゝと。かやうに詠し給ひしかば。神も哀とや思し召されけん。御衣おんころもの袂に御影をうつし。それより都男山に誓を示し給ひ。国土安全を守り給ふ。愚と不審し給ふや

わき〓優しやな女性なれども此の里の。都に近き住まひとて。名にしおひたる優しさよ

して〓さて〓お僧の住み給ふ在所はいつくの國やらん

わき〓これは信濃の國木曾の山家の者にて候

して／木曾の山家の人ならば。栗津が原の神の御名を。問はずはいかで知るべきぞ。これこそ御身の住み給ふ。木曾義仲の御在所。同じく神と齋はれ給ふ。拝み給へや人々よ

わき／不思議やさては義仲の。神と現れ此處に。いまし給ふは有難さよと。神前に向ひ手を合はせ
同音／古のこれこそ君よ名は今も。これこそ君よ名は今も。有明月の義仲の。佛と現じ神となり。世を守り給へ
る誓ぞ有難かりける。旅人も一樹の蔭。他生の縁と思し召し。此の松が根に旅居し。夜もすがら經を讀誦して
五衰を慰め給ふべし有難き値遇かなげに有難き値遇かな。さる程に暮れて行く日も山の端に入相の鐘の音の。
浦曲の波に響きつつ。何れも物凄き折節に。我も亡者の來りたり。その名を何れとも知らずは此の里人に問は
せ給へと夕暮の草のはつかに入りにつけり草のはつかに入りにつけり

—— 中入 ——

待語／わき・脇連／露を片敷く草枕。露を片敷く草枕。日も暮れ夜にもなりしかば。栗津の原のあはれ世に
亡き影いざや弔はん亡き影いざや弔はん

△声／して／落花空しきを知る。流水心無うしておのづから。澄める心は垂乳女の

同音／罪も報も因果の苦。今は浮まん御法の功力に。草木國土も成佛なれば。況や生ある直道の弔かれ
これ何れも頼もしや頼もしやあら有難や

わき／不思議やな栗津が原の草枕に。見ればありつる女性なるが。甲冑を帯する不思議さよ

して／なか／に巴といつし女武者。女として御最期に。召し具せざりし其の恨。

わき／執心に残つて今までも

して／君邊に仕へ申せども

わき／怨は猶も

して／有磯海の

同音／栗津の汀にて。波の討死末までも。御供申すべかりしを。女として御最期に捨てられ。参らせし恨めしや。
身は恩の為。命は義に縁る理。誰か白眞弓取の身の。最期に臨んで後名を惜しまぬ者やある。

曲／さても義仲の。信濃を出でさせ給ひしは五萬餘騎の御勢。銜を竝べ攻め上る。砺波山や俱利伽羅志保
の合戦に於ても。分捕高名の其の数。誰に面を越され誰に劣るふるまひも。亡き世語りに名を惜し思ふ心か
な

して／されども時刻の到来

同音／運槻弓の退く方も渚に寄する栗津野の。草の露霜と消え給ふ。處はこそお僧達。同處の人なれば順
縁に弔はせ給へや。

さて此の原の合戦にて。討たれ給ひし義仲の最期を語りおはしませ

して一頃は睦月の空なれば

同音一雪はむら消えに残るを唯通ひ路と汀をさして。駒をしるべに落ち給ふが。薄氷の深田に駆け込み弓手も馬手も。鏝は沈んで。下り立たん便りも無くて。手綱に縋つて鞭を打てども。退く方も渚の濱なり前後を忘れて控へ給へりこはいかにあさましや。かゝりし所に自ら駆け寄せて見奉れば。重傷は負ひ給ひぬ。乗替に召させ参らせ此の松が根に御供し。はや御自害候へ。巴も共と申せば。其時義仲の仰には。汝は女なり。忍ぶ便りも有るべし。これなる守小袖を。木曾に届けよ此の旨を。背かば主従三世の絶え果て。永く不興と宣へば。巴はともかくも涙に咽ぶばかりなり。

してかくて御前をたち上り

同音一見れば敵の大勢。あれは巴か女武者。餘すな洩らすなど。敵手繁くかゝれば。今は退くとも遁るまじ。いで一戦嬉しやと。巴少しも騒がず。わざと敵を近くなさんと。薙刀ひきそばめ。少し恐るゝ気色なれば。敵は得たりと切つてかゝれば薙刀柄長くおつ取り延べて。四方を攘ふ八方攘。一所に當る木の葉返し。嵐も落つるや花の瀧波枕を疊んで戦ひければ。皆一方に切り立てられて跡も遙に見えざりけり。跡も遙に見えざりけりして一今はこれまでなり

同音一今はこれまでなりと。立歸り我が君を。見奉れば痛はしや。はや御自害候ひて。此の松が根に伏し給ふ御枕の程に御小袖。肌の守を置き給ふを。巴泣く泣く賜はりて。死骸に御暇申しつゝ。行けども悲しや行きやらぬ。君の名残をいかにせん。

——物著——

とは思へどもくれぐれの。御遺言の悲しさに。粟津の。汀に立寄り。上帯切り。武具心静に脱ぎ置き。梨打烏帽子同じく。かしこに脱ぎ捨て。御小袖を引き被き。其の際までの佩き添えの。小太刀を衣に引き隠し。處は近江なる。信楽笠を木曾の里に。涙と巴は唯一人落ち行きし後めたさの。執心を弔ひてたび給へ執心を弔ひてたび給へ